そんみん元気便

「なして…？」

二郎　よ！こんちは！元気か？

三郎　こんちは！今何処に居んの？

二郎　おらは松川だ、おめは何処だ？　じっちとばっぱは元気か？　孫も居だったよな。かーまだ（川俣）のがっこ（学校）さ行ってんだべ？

三郎　おらは伊達の伏黒の仮設住宅に居て、息子等は吉倉のアパートに居んだ。じっちとばっぱは元気だけんど、ちっと弱ったな、田んぼも畑もねーし、何にもしねーがら。

　孫らも毎日大変みて～だ。学校も遠くてスクールバス通学だし、朝早く起こすのも可哀想なんだ。

二郎　ほーが！皆んな大変なんだよな。**なして、こんな事になったんだべな。**飯舘村に帰られっぺが？前の話だけんと、村だの国だので3200億円もかけ（掛け）で除染するって言ってだみでーだけんと。。。

三郎　おらは帰らんにぇど思うな。どうせ除染できたとしたって息子等は、孫は絶対帰さねー！って言ってるし、こっちで仕事もめっけだ（見つけた）みでーだから！

二郎　んだな、帰らんにぇよな！飯舘村はいつまでも俺達の郷里だけんと山だの田んぼだの全部は除染できねもんな。

　おらは3200億円も除染に金を掛げんだったらその内の一部を村民のために金を掛げでもらいでと思うんだ。避難する前の飯舘村の世帯数は1700世帯だったんだから一世帯一億円づつ配ってくれたらいいと想うんだ。

　そしたら皆んな今の仮住まいではなく、土地を買ってちゃんとした家を立てて、そこから新しいスタートが切れると想うんだ。昔の飯舘村のようにおじさんやおばさん、息子や孫達が気軽に帰って来れる第二の郷里を造れると想う。

　今のまんまだと、住んでいる所も、仕事もやってる事全部中途半端で心が落ち着かねー。早く元の普通の生活がしたいと想う！

　んだから、前を向く為の、明日に生きる為の**一億円計画！**

　どうだべ？

イラスト:柴口正武

おじいちゃんおばあちゃんへの手紙

避難していた旅館への礼状

三郎　ん、おらも賛成だ！

　おら達の生活はおら達で守るしかねーど想う。行政だの国だのゆう（言う）事ばっかし聞いてねーで自分で動かなんねど思う。

　家さ帰ったら、じさまだの仲間とも良く話してみっぺ！

二郎　今度会うどき（時）は「あだらし（新しい）家で孫も帰って来て家族皆んなで住んでんだ！」なんて話してーな。

　んじゃな。気一つけて帰れよ！！

平成23年度負げねど飯舘決算報告書

収入 6,701,415円　支出 4,172,618円　繰越 2,528,797円

1．収入の部

項目	収入済額	摘　　要
活動支援金①	2,956,621	主に口座への振込寄付金額（注1）
活動支援金②	3,408,041	ぬちゆい基金ほかより（注2）
活動支援金③	244,379	各種集会等へ参加した場面で頂くカンパ金
雑収入	92,374	貯金利息　健康手帳売上（村外者へは1,000円で販売）
合計	6,701,415	

2．支出の部

項目	支出済額	摘　　要
消耗品	291,563	名刺、紙、プリンターインク、カメラ等（注3）
交通費	396,663	駐車場代、子どもの健康調査への引率費用など
通信費	140,665	健康手帳配布関係の通信費（注4）
会議費	109,751	学習会、村民集会の会場費等
印刷費（手帳）	2,828,000	健康手帳印刷費（サガデザインへ）
その他	365,976	健康手帳監修経費（注5）村民集会イベント経費（注2）
印刷費（会報）	40,000	かわら版印刷経費（注6）
合計	4,172,618	

※活動支援金は今年度に関しては三種類に分類。（次年度以降は統合）
「負げねど飯舘!!」イコール「健康手帳」と考えている方が多いのではないかと考え、寄付者の意志を確認していない寄付金については①に計上した。結果として健康手帳の直接の印刷費、配布に関連しての経費、監修に関しての経費がそれらを上回ったので健康手帳への寄付を意図した寄付者の要望に沿うことができたのではないかと考えている。

（注1）寄付口座への入金など、寄付者の意志を確認していない金額
（注2）寄付者の意志を確認している金額（村民集会の経費のキャッシュバックも含む）
（注3）カメラについては備品かと思われたが、この項目へ計上
（注4）今年度は電話代等は支出していない。（今後は計上予定）郵便宅配便への支出のみ。
（注5）健康手帳の監修者は監修料を受け取らなかった。交通費等の経費が発生した部分のみ。
（注6）かわら版の1号2号3号についてはサガデザインのご厚意により無料で印刷できた。

　「活動支援金」として寄付を募ったので本来は収入項目を分ける必要はありませんが皆さんには「健康手帳」や「子ども達への支援」のイメージが強いのではないかと思います。議員会館へ要望活動に出向いたり、学習会の企画など広報しきれない活動も多々行っていますが、皆さんから頂いた支援金の半分以上は「健康手帳」に使わせていただきました。多くの方に活動支援金を頂いています。中には毎月のように定期的に支援くださっている方もいらっしゃいます。本当にありがとうございました。ずいぶん遅くなってしまいましたが健康手帳の発行も行うことができました。会の趣旨はホームページに記載されている通りですが、今後の活動については具体的なものを模索している状況です。皆様から頂いた支援金は大切に使わせていただきます。今後もご支援いただければ幸いです。

募集中！

ご意見、ご要望のある方はぜひ編集部までお知らせください。まってます！

090-7568-7392
〈渡辺富士男〉

編集後記　帰還困難区域も居住制限区域も避難指示解除準備区域も、私達村民にとっては、どれをとっても同じ飯舘村の郷里だった。飯舘村の一番の「うり」は自然そのもので特に、空気と水は新鮮だった。それが放射能というものに侵されてしまい村民ひとりひとりの人生設計さえも奪われてしまった。村民グランドには雑草が生え、毎年恒例だった盆踊りも、今年はできないだろうと淋しく感じてしまう。
私達は日々、一所懸命生きることと同時に原発事故という、こんな事が二度と起こらない様、そしてこんな想いを二度と繰り返さない様に全国の人達に伝え、風化させない為の努力を、それぞれみんなでして行かなければならないだろうと想います。(F)

負げねど飯舘!!

かわら版④

No.4
2012年8月11日
愛する飯舘村を還せプロジェクト 負げねど飯舘!!
http://space.geocities.jp/iitate0311/

編集部 渡辺 富士男 〒960-1241 福島市松川町西長壇 8-17
メールアドレス fuyu-no-yama.11@ezweb.ne.jp　電話 090-7568-7392

我が ふる里 飯舘!　帰りますか？　帰られますか？

リレーエッセイ

前回 北原 康子さんからの紹介
▼
今回 上田 秀 さん

頑張られるかな？　いや頑張っぺ！

昨年3・11の大地震

　そして思いもかけない原発事故。人生の中でこれほど自分達の生活が一変してしまうとは誰一人考えつかないことでした。いま、避難生活を送ってみて、今まで当たり前と思っていたことがいかに大切であったか、幸せであったかを知りました。地域の輪、隣近所とのふれあい、友との語らいの中で腹の底から大声で笑っていた日々、今は笑うことも星空をみあげることさえ忘れかけています。そんな私たちですが、皆で頑張っている事があります。それはあさのラジオ体操、最高齢者は85才から65才以上の方々で広場に集まってやっております。（ラジオ体操の始まりは、昭和3年（1928）、昭和天皇即位の大礼を記念し、国民保健体操として始まりました。戦争で一時中断されましたが昭和26年に現在の形で復活しました）仮設で体操を始めて良かった事を紹介すると体を動かす事は勿論ですが、体操の前後にお互いにいろんなことを話し合ってすばらしいコミュニケーションがとれることです。人口の少ない村の私たちだからこそ自然に身に付いた思いやりの心、助け合いの心がここにしっかりいきています。いつ村に帰れるのか、又帰れないのかと考える時、苦しいほどに胸は痛み　あの美しい村はどうなってしまうのだろうか。人の背丈ほどの草におおわれた田畑、人の住まない閑散とした村の姿を目にする時、涙があふれて止まりません。でも皆で力を合わせて、もうちっと頑張ってみましょうか。　（上田 秀）

いいたてからの発信

常任理事の愛澤卓見が雑誌DAYSJAPAN6月号に寄稿した文章に加筆修正を加えたものです。「負げねど飯舘!!」の総意ではありませんが、私たちが村外に対してどのようにアピールしているかをお知らせします。

皆さんは「大洪水よ　我が亡きあとに来たれ」という言葉をご存じでしょうか？フランス・ルイ15世の、特に晩年の失政と放蕩を象徴する言葉で「あとは野となれ山となれ」と同義の言葉だそうです。キリスト教圏において大洪水は「ノアの方舟」伝説のように「終末」をイメージさせるものですから、ひどく無責任な話ですね。

今回の地震、津波、それに続く原発事故は日本全体に「終末」を強く印象付けることになりました。ゲームやアニメの世界では「終末後」という世界観のストーリーも多々あり、震災後、飯舘村で高い空間線量が測定され報道されていた時期は自分たちがフィクションの世界に迷い込んだような錯覚を感じていました。私たちにとっては四月二十二日の計画避難区域の指定まで「屋内退避」の指示さえ出なかったのですから、マスコミで報道される「汚染された飯舘村」と日々の生活を送っていた「飯舘村」が同じであることを理解することは難しいものがありました。それは避難し、一年が経過する現在も同じかもしれません。「負げねど飯舘!!」では「将来に禍根を残しかねない健康問題について動こう。これに関しては誰も異論はないだろう。」という判断のもと「WBCでの測定（の要望）」「初期被ばくの推定（の要望）」「健康手帳の作成」にまい進してきました。しかし「放射線による健康被害（への懸念）」という課題に対するもっとも単純な解決策は「被曝を避ける」ということなので、「帰村」「帰還」や「除染」「雇用」というテーマとバランスを取る必要が出てきました。また、補償や賠償の問題もからんできています。昨年の十月に「負げねど飯舘!!」が主催した住民集会は野次の飛ぶ「荒れた集会」注1 となってしまい、住民同士が意見を出し合うことの難しさを露呈しました。

私個人としては放射性プルームに包まれた３月15日から３月20日の間に飯舘村や浪江町・川俣町で防護をせずに過ごしてしまった住民や避難民に対して、しっかりとした医療の枠組みを構築することが必要で、「帰還」「除染」は別の話だと思っていますが「原発作業員の被ばくと比べると問題ない」等の意見をもっている人と平行線の議論をすると精神的に消耗してしまいます。現時点では今回の被曝で健康被害が発生するかどうか、どのような被害が発生するかは予測できません。当事者である飯舘村の住民が事故直後の内部被曝の測定を政府に求めて動いたにもかかわらず、適切なタイミングで適切な（できるかぎりの）調査を行わずに「問題なし」というスタンスをとるのは不誠実すぎます。精神的慰謝料が月10万円で仮に10年間もらったとしても1200万円。癌などの深刻な疾病が発生した場合、十分に治療を受けようとしたら足りないのではないでしょうか？　放射線医学総合研究所の重粒子線治療は先進医療のために300万円以上の金額がかかります。入院治療費は？　その間の生活費は？　精神的慰謝料などより医療費の保障が欲しいという意見もありうるのではないでしょうか。このまま枠組みを作ることもなく時間が過ぎてしまい、将来、民間の保険に入ろうとしても「飯舘村出身？　保険に加入できませんよ。」なんてことになったら……。ちょっとブラック過ぎる予想ですが、この一年間の政府の対応を見ると真面目に心配してしまいます。

さて、前述した「荒れた集会」以降「住民同士の分断」がマスコミでもクローズアップされるようになってしまいました。「やっと村民の声が外部に届いた。」という評価もありますが普通の村民の意識とのズレもあります。たとえば仮設住宅の住民と借り上げ住宅（アパート）の住民との間で待遇に差があり、いさかいがあるなどという馬鹿馬鹿しい報道があったり注2 村長派（帰村）、反村長派（移住）といったわかりやすい構図や国や除染への疑念などの単純な問題提起がほとんどです。

実際の村民はもう少し具体的な面、自分の人生の進路の問題として考えています。たとえば専業農家の若い世代で再起を考えている人はほとんど村外に出ています。飯舘村で農業を再開するのは不可能に近いとの判断ですが、その判断のバックボーンは「風評」と「プライド」です。「風評被害」の懸念はもちろんですが、消費者に自信をもって提供できないもの、自分が納得できないものを作ることに耐えられないという判断があります。（ベクレルが出るのだから風評ではなく実害ですが。）農地の除染と言っても有効な手法が確立されて、山林からの放射性物質の流入の心配がなくなるまで何年かかるのか？年に一回収穫する農作物、米を例にすれば一生に何度収穫できるのか？何度その試行錯誤のチャンスを棒に振ることになるのか？決断を迫られたのです。

また、兼業農家で若い子育て世代が会社などに働きに出ている場合（村内では一般的）などはもっと複雑です。兼業農家の農業収入は金銭ベースにすると微々たるものですが、農家同士の助け合いのネットワーク、コミュニティがあり生活に密着していました。都市部の方々にはイメージできないかもしれませんが野菜作りには趣味や生きがいとしての側面もありました。注3 現在、福島市などの都市部に避難している高齢者の中には「飯舘村に帰りたい。」という希望を強く持っている人がいます。帰ってもコミュニティがないこと、子育て世代に二重生活を強いる可能性があること、農業ができないこと、仮に作っても孫に食べさせられないことなど「なんのために帰るのか？」意義を見出すことは困難です。そして若い子育て世代であればそれは更に顕著です。高齢者の希望を叶えて住まわせてあげたいとの思いもありますが、自分の世代はどうするのか？子どもたちの進学、進路も考えなくてはなりません。

若い世代は実験的な農地除染や実験的な営農についても懐疑的な視線で見ています。仮にどこかで高濃度に汚染された農作物が出てきたとき「飯舘村産か？」といわれなき疑念をかけられるのではないかという危惧もあります。世田谷区で2マイクロシーベルトの線量が計測されたとき「飯舘村並だ」と大騒ぎされましたが、あの時点での2マイクロシーベルトは村内的には低い値だったので「どこの飯舘村だ？」と村民はあきれていました。将来のために実験そのものは必要だとの認識と、おそらく失敗するであろうとの認識の両方を持っていますが注4 若い世代が懸念しているのはそこではありません。

仮に村を出ていくとしても心中は穏やかではありえません。 住民票はどうするべきか？　補償や賠償はどうなるのか？ 土地を買い上げてもらえるのか？ 借り上げてもらえるのか？ 固定資産税はどうなるのか？ 住民税はどうなるのか？ 人の少なくなった村でインフラの維持はできるのか？ 火災が発生した場合に対応できるのか？ 土地を東電に賠償させると東電の持ち物になってしまうのか？　そうなったら東電の発言権が強くなって村は最終処分場になってしまうのではないのか？ 数年後、振り返った時に故郷はどんな姿になっているのか？　「いつの日か帰りたい」という願いは我儘なのだろうか？　「いつの日か帰りたい」と願いつつ「今は帰れない」というのは許されないのだろうか・・・。村民同士がお互いに意見を出そう、話し合おう、議論の場をつくろうと思っても、まず個人の中で考えをまとめることができていない状況です。

残念ながら事故は発生してしまいました。除染にしても補償にしても東京電力の内部留保等の資産で賄うことは不可能なので、国による公的資金の投入や電気料金の値上げなどが必要になるでしょう。国民全体がこの事故をどう考えるのか。負担することを了承できるのか。私は疑問に思っています。今回の事故に対する反省として世論は脱原発を支持する方向で動いていますが、それが実現されることと被災者に対して十分なケアが行われるかどうかは別問題のようにも見えます。（被災地で脱原発の運動が活発でないのはその証左でしょう）。被害を小さくみせることで利益を得るのは国で、それを代弁する「御用」学者と言われる人々がこの世界に存在するのは間違いないようですが、現時点で彼らの言葉に普通の国民がまともに付き合うとは思えません。注5 問題は国の負担は国民（自分たち）の負担であるという当然の事実に直面した時（そしてそれは本当に当然のことなのですが）ではないでしょうか。このままでは被害を小さくみせることで利益を得る一部の人々の思惑どおりになってしまいそうです。私たち「負げねど飯舘!!」はＮＰＯにもなっていない緩やかな住民団体ですが、多くの方々の協力により「健康手帳の発行」など具体的な活動も少しは出来ました。今後も「飯舘村」をキーワードにして情報を発信していきたいと思いますが、今まで以上に村民同士が話し合う場を作っていかなければならないと考えています。

ある種の終末（大洪水）は来てしまいました。私たちはそのタイミングに出会ってしまったようです。国や原子力村と揶揄される集団のなかには未だに「大洪水よ　我が亡きあとに来たれ」というスタンスを崩していない人々がいるようですが、どういった認識なんでしょうね。

注1 野次を飛ばした人物が「負げねど」の関係者であり、それを止めることができなかったことについては弁明できない。（不愉快な思いをされた方々には、この場を借りて再度謝罪したいと思います。申し訳ありませんでした。）ただ、一人の考え方の違う人の野次によって「荒れた集会」となってしまう空気があの時期にはあったことは否定できない。

注2 支援物資配給などでマンパワー不足で手がまわらなかったことに対する単純な行政批判があっただけの話。若い世代が借り上げ住宅（アパート）で、その親世代が仮設というパターンも多い。そんないさかいなどあり得ない。普通に考えたらわかる。

注3 新しい野菜や珍しい野菜にチャレンジすることは普通。「飯舘村に帰りたい」と強く願うからといって保守的というわけではない。ある種の「開拓者魂」をもって日々、試行錯誤する高齢者の数は多い。

注4 「ふくしま再生の会」をはじめ独自に除染に取り組んでいる村民もいる。農地や山林における国の除染実験や除染実証に比べれば格段に実践的に見える。その取り組みや努力に敬意を表する人も多い。しかし、村の広大な山林、農地を目の前にして徒労に終わるのではないかと危惧する人も多い。

注5 学者の信用度について、国県、市町村などの行政組織は本質的に興味がないように見える。この間、住民の専門家への不信に対応した自治体は皆無だった。（二本松市長が山下教授の講演会後に疑問を感じ市政を方向転換したのは稀有な事例だった。）学者、専門家という存在が行政の単純な通過儀礼「専門家から話は聞いた」としての機能でしかないと住民側も認識してしまったのかもしれない。（それこそが御用学者だが…。）その住民の認識に気づいていない（気づかないフリをする）のは当の行政だけであろう。

写真:安齋 徹